

Title	雅樂(多忠龍著, 六興商會發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.64- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0064">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0064</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

雅 樂 (多忠龍著)  
六興商會發行

本書は千三百年の傳統の誇を有する雅樂を以て父子連綿と相承けて宮廷に七歳の童子より七十有八歳の翁の今日に至る迄奉仕し、斯道精進に怠りなく且つ後輩の誘導に力められる元宮内省樂長多忠龍翁の七十年間の思ひ出の口述で有益の良著である。

雅樂は近年日比谷公會堂等にて一般に公開せられる迄は容易に接することも出来ず、たゞ雲上のものゝ如くに解せられて居つた。更に過般二千六百年の盛典に際會し參列者一同は新作なるも昭和樂悠久等を陪覽するの光榮に浴し、これに依つて悠遠の昔の大御代を追懐し國體の精華に今更の如く、感激したのである。

翁の語る處に依ると、日本化して居るが、支那より渡來の唐樂(陵王、太平樂、越天樂)半島よりの高麗樂(納蘇利、白濱)の外に、印度よりの迦陵頻伽、林邑國(安南)よりの陪臚や、大月氏(中央亞細亞)よりの還城樂や、渤海國(沿海洲)よりの新鞮、鶻などもあり、これに神代以來の神樂歌や、神武天皇御東征を偲び奉る久米舞や東遊などもあつて、今日云ふ大東亞共榮圈内の音樂を一まとめにしたものと云ふべきである。

雅樂の樂器には獨特のものがあつて、管樂器(笛、篳篥、笙)絃樂器(和琴、箏、琵琶)打樂器(太鼓、鞀鼓、三の鼓、鉦鼓)の三種の外に笏拍子などもあつて、樂曲の種類により夫々組合せらるゝのである。なほ笛の中に支那よりの横笛(龍笛)や、半島よりの高麗笛(狛笛)や、神樂笛(太笛、倭笛)の三種があり、篳篥は中央亞細亞より傳はり大小兩種類があつたが、今では小のみ傳はつてゐる。笙は漢代の樂器で鳳笙とも云ひ「合竹」即ち他の兩管の指導をなすもので、かの後三年役に豊原時秋が新羅三郎義光に足柄山で其の秘奧を傳授したことは人口に膾炙せられてゐる。又絃樂器の中、和琴は倭琴とも云ひ「御神樂の儀」には缺く可らざる樂器で、御琴又は「みこと」と云ふべきである。次に打樂器の中、太鼓には大太鼓(火焰太鼓)鈞太鼓、擔太鼓の三種があり、鉦鼓にも同様である。又鞀鼓は樂の緩急長短を司どるタクトとなるべきである。これ等樂器の外に、舞樂に使用する面装束等のあることは忘れてならぬ。樂器には宮中の御物を始め古來の名作が傳存し各時代に名人が輩出してゐるが、明治時代には「君が代」の作曲者と云はれる林廣守などは名人中の名人と云はれる。餘談であるが君が代の始めて演奏されたのは明治十三年天長節と云ふことである。

雅樂に奉仕する樂家には宮中に奉仕の「京都の樂人」これは神人井身命の子孫等で、大阪天王寺に奉仕の「天王寺の樂人」これは支那より歸化の秦河勝の子孫と云ひ「奈良の樂人」これは半島より歸化の高麗の夫連王の子孫と云はれ、合せて「三方の樂人」

と云ふ。明治天皇の東幸後に、この三方の樂人の中より召に應じて東京に永住し子孫今日まで宮廷に奉仕してゐるのである。宮内省にても始め雅樂寮、雅樂局、雅樂部を設けられ、明治十八年三月より大震災まで牛込見附内に雅樂稽古所があり、後年、洋樂が加へられて樂部に改稱され、今日に及び、舊本丸内に壯麗な舞臺を有する廳舎である。

雅樂には三管共に四大曲即ち蘇合、萬秋樂、春鶯囀、皇鸞があり、之れを皆傳されると一人前となるのである。又神樂にも笛と箏に庭燎の音取と祕曲があり、其の奉仕は山井、安倍兩家と定まつてゐた。

宮中に於ける御祭典には神樂と云ふものは大切で、新嘗祭の外、紀元節、十二月十五日、先帝祭の三祭典の「御神樂ノ御傳」は仲々莊嚴なものである。殊に新嘗祭の神樂は特別のもので午後六時より翌日の午前一時過までの長時間、恐れ乍らこの間聖上には御親祭であり、他の時は其の儀の濟むまで概ね夜の十二時半頃まで御寢遊ばされぬである。これ等のことは存じ上げぬ人が多い。評者は昭和御大禮に際し掌典部に兼務し、大嘗祭の御儀より各御神樂の儀を拜するの機會を得たので、本書を讀み追憶の念を一層深くし寔に感慨無量である。

猶ほ本書には樂人の修業の苦心と斯道世襲に對する保存賜金等についても述べられ、雅樂に關する知識を與へらるると共に、之れを再認識せしめるものが多々あり、又交通の便乏しき明治初期に於ける大和、伊勢より遠くは出雲まで雅樂の公用を以て出張し

た節の苦勞談等興味津々たるところも少くない。

終りに著者の老健を祈り、更に今回に述漏れのものなどをまとめて續篇の類の上梓を希望して止まないものである。(昭和十八、四、十一、警戒警報解除の報を聞き、讀後の記憶を記す。武田勝藏)

### 日本交通史之研究

(武藤長藏著)  
内外出版印刷株式會社發行

武藤博士の日英交通史研究は既に久しい。紙上にその成果をみるやうになつてからも、恐らく十數年を経過するであらう。初版「日英交通史之研究」が、さうした多年の研鑽の集大成として公刊せられたのも、顧みればはや五年前のことである。當時筆者はこれを本誌上(第十六卷第三號、昭和十二年十一月)に紹介して、その末尾に著者のこれまでの研究に對する多大なる盡力に深く敬意を表すると共に、進んではかくの如き著者の終始たゆまざる努力が一層輝かしく結實するの日を衷心より祈つて置いたが、果せるかな、その後凡そ二歳にして昭和十四年一月、同氏はこの著を主論文として經濟學博士の學位を得られた。その審査委員たりし本塾經濟學部教授高橋誠一郎、野村兼太郎兩博士の審査要旨(三田評論、昭和十四年二月號參照)に曰く「著者武藤氏が長年に互り倦むことなき努力に依つて、日英交通史料の蒐集をなし、それ等を一々検討攻究し、從來何人も想到せざりし若干の問題を指摘し、これに考察を與へ、わが經濟史學界に寄與すること頗る大である。」また「吾人は本論文並びに著者の過去の諸業績に照して、